

〈書評〉

田中敏雄『近世日本絵画の研究』

—忘れられようとする絵師に向けた熱心で真摯な調査研究—

河田昌之

1 はじめに

田中敏雄先生は、大阪芸術大学において平成25年3月末で定年を迎えられるにあたり、従来から積極的に取り組んでこられた日本近世絵画史研究の過程で発表された諸論文から主要な論考をもって『近世日本絵画の研究』（作品社、2013年3月30日発行、定価5600円）とし、学校法人塚本学院の大阪芸術大学出版助成をもって上梓された。いずれの論考も所蔵者のもとや所蔵館に出かけ、作品を実見し調査された体験に基づいている。それは田中先生の関西学院大学での恩師・源豊宗先生から美術史研究の第一歩として作品をしっかり観ること、実証的に論証するという美術史学の根本的な取り組み方を学ばれたことが基盤になっている。したがって机上で組み立てられた美術史論ではなく、実証性を重視した論である。研究者の視点で調書を取り、印章や落款はもちろんのこと、表現の細部にまで注意を払って自ら写真を撮っておられるので、それぞれのデータが生きている。この書物をひもとくと、45篇の論文が近世絵画の世界に我々を誘い込む。それは簡潔な文体とともに、適宜配された図版が豊富で、ある程度大きくレイアウトされ、見やすい構成になっていることとも関係があるように思われる。

論考は次のように四部で構成されている。第一章は狩野派の研究、第二章は土佐派・諸派の研究、第三章は京都画壇の研究、そして第四章は大坂画壇の研究である。専門とされる近世絵画を画派に沿って分割して整理されており、研究対象が明確になっている。

全体を読み終えると、作品と丁寧に対峙し、画題の解明や

作品の様式論、また批評や問題提起もなされており、美術史研究の王道に則って論が展開されていることがわかる。しかし著者の研究を特徴づけるのは、こうした基本的な調査研究を基盤にして、従来の美術史研究では見過ごされていた絵師や作品にスポットを当て、その意義をとらえるという研究姿勢をあらたに加えて、美術史研究の暗部を明らかにしようとする点にある。このような研究は大物釣りのな作品研究とは異なり、地味であり目立たないかも知れないが、既知の作品だけが美術史を作り上げるのではなく、同時代に制作された作品にできるだけ多くあたることと、観る経験を重ねることで、美術史を構築する作品の層を一枚一枚はがし、あるいは積み上げることで見えてくるものがあるはずであるとする観点に立っている。著者のこうした観点は美術史研究者の誰もが持たねばならないが、それを実践しようとする体力や精神力、根気が要求されるため、果たせないでいる場合が多くある。しかし本書には着実な研究の成果が公表されている。いつも明るい表情で、研究ばかりか余暇においても軽やかに動きまわり歌う先生の姿に、その原動力が垣間見えるが、やはり大学、大学院時代、学芸員時代を経、大学での教員時代を通して蓄積された経験と研究の過程が、それを支えているのであろう。この書物の特徴をあげるうえで、田中敏雄先生の研究経緯に触れることから始めたい。先生は筆者の大学の先輩で、学芸員としてのキャリアも上、年齢は一回り大きい。専攻分野が日本絵画史であるため、多くのことをご教示いただき、作品調査にも同行させていただいた。それらの経験も含めて主観的な見方が加わるかもしれないが記述を進めよう。

2 美術史研究のはじまり

田中敏雄先生の研究プロフィールについて、『近世日本絵画の研究』の奥付けを補足しながら述べることにする。1942年9月大阪市に誕生された先生は、1966年に関西学院大学文学部美学科を卒業、1968年に同大学文学研究科(修士課程)を修了された。その年に神戸市の住吉山手にある白鶴美術館に学芸員として勤務され、1986年まで在籍された。その間、関西学院大学、神戸大学、大手前女子大学ほかで非常勤講師も務められた。1987年4月から2015年3月まで大阪芸術大学芸術学部教養課程の教授として教鞭をとられ、現在は大阪芸術大学名誉教授、美術史家として研究を継続されている。

田中先生が初めに勤務された白鶴美術館は、清酒界の最大手の一つである白鶴酒造を母体とし、1934年(昭和9年)に開館した長い歴史のある美術館である。全国に博物館が設立される草創期の草分け的な存在で、関西の私立美術館としては開館が2番目に早い。住吉川を右手にし、六甲山を背景にして建つ青銅葺き白壁の宮殿風建築は、竹中工務店の建設した近代の名建築として評価が高い(写真1)。阪急電車やJRに乗って住吉川あたりから六甲山側を望む時、堂々とした偉容はしっかりと目に入る。鶴翁の号を持つ白鶴酒造第7代嘉納治兵衛(1862～1951)氏が蒐集した中国の商周時代の青銅器や唐時代の銀器や陶磁器、また日本の経巻や



(写真1) 白鶴美術館

絵巻、屏風絵など、東洋の古美術コレクションがよく知られている。近年は新館が建設され、トルコやイランの絨毯コレクションも展示されている。関西のコレクターや美術館史を語る上できわめて重要な位置づけがなされる美術館である。

田中先生の在職中は、のちにもあげるが中村純一館長、中村氏が辞められたあとは館長が瀬木純治氏、井上敏氏と替わられた。学芸は山中理芸課長(現)、そして学芸員も入れ替わっているが、伊藤明美氏、斎藤朋子氏、海原靖子氏が就かれた。美術館に何うといつも和やか迎えていただきスタッフの方々のあたたかい雰囲気にも包まれたことを思い出す。その雰囲気は現在も継承されている。田中先生は、井上氏と山中氏の3人で台湾、インドネシア、ミャンマー、韓国や中国などに7、8年に渡り、旅行された。よほど馬が合ったようで、その珍道中振りを聞くのが楽しかった。よい職場とスタッフに恵まれ、研究者として社会に出られた初めから好スタートを切られたのである。春と秋の二期だけ展覧会を行う白鶴美術館のシステムは、関西学院大学の美学研究室の今井清先生や磯博先生には格好のからかいネタを提供し、田中先生が非常勤で講義に来られた折など、よく冗談まじりの話題に上り、先生はその都度笑いながら反論されておられたことも思い出される。しかし田中先生は、こうした中で着実に研究を重ねておられたことは、次の2論文が証明している。

狩野元信筆の「四季花鳥図屏風」に関する研究論文が『美術史』70号(昭和43年9月)(本書第一章第4節)に、伝狩野永徳筆「四季花鳥図屏風」の研究論文が『美学』111号(昭和52年12月)(本書第一章第5節)に掲出された。白鶴美術館のコレクションの中には国宝2件(75点)、重要文化財22件(39点)が含まれているが、重要文化財のうちの1件が狩野元信筆「四季花鳥図屏風」である。田中先生はこの屏風について次のように述べておられる。「もと興福寺に伝来したものであり、明治維新の際、中村堯円(中村雅真の父)が興福寺に金四千両を立替えた代わりとして、興福寺から中村家に、この元信の花鳥図屏風と伝永徳の「四季花鳥図屏風」(六曲一双)とが譲られた。その後、中村雅真の実弟であった嘉納治兵衛が創設した白鶴美術館の所蔵品となった。」

前者の論文は、元信筆「四季花鳥図屏風」の伝来、形状と寸法、落款・印章にある「狩野越前法眼元信生年七十四筆「元信」(朱文壺印)」、屏風裏面に貼られた修理銘とその解説、そして絵の金地構成や類似作品との比較を内容とする。作品観察の結果が反映され、美術史の論文として実に要を得た内容である。現在の若手研究者の論文に比べると、断定的な表現を避けたやや素っ気ないとも思われる表記もあるが、それこそ26歳という若年の研究者の謙虚さの現れと言い替えられる。基礎的なデータが盛り込まれており、この作品研究においては必読の論文となっている。それは狩野派を中心とした近世絵画研究の第一人である武田恒夫先生ほかの論考にも引用されていることからわかる。

後者の伝永徳筆「四季花鳥図屏風」に関する論文は、作品の伝来、先行研究の整理、画面構成、画題、屏風裏面の貼紙墨書の読み取り、それを受けて伝承筆者の検討が行われている。画面構成、画題について、雪舟や相阿弥といった室町時代の花鳥図屏風や山水図などを取り挙げて検討され、金地や金雲の使用と画面構成を桃山時代の作品と比較、さらに桐鳳風図という画題からのアプローチもなされた。それを受けて伝承筆者永徳説に対して永徳の父・松栄の作とする結論を導かれた。これは武田恒夫先生が提示された松栄様式による作品とする新説を発展させた論であることを結論中に書かれているが、「松栄と筒井順慶という画家とパトロンの関係、惣金と金磨付の屏風のちがいを等々を考察する資料となるものと思う。」との見解でまとめられている。この論考は35歳の時のものである。前者の論文に比べて、作品観察に基づくことはもちろんのこと、他の作品や資料の読みと考察が緻密さを増し、明確な主張とともに、密度の高い論考となっている。いわば前者は美術史学会デビューの論文で、後者は学芸員としての経験が加味された中堅に至ろうとする研究者の論文である。両者を読み比べると、美術史研究での堅実な歩みとそれに基づく成果がたどられる。両論文が本書の第一章に載せられている。基礎的な作品データを正確に公表し、作品の熟覧とその特徴の読み取り、そして論証する姿勢は、両論文において出来上がったと言える。それ以降に論述された数々

の論考にはこの姿勢が貫かれており、両論文が著者の原点になっているといってもよいであろう。

これらの屏風を興福寺から譲られた中村雅真氏は白鶴美術館館長で常任理事を勤められた中村純一氏の叔父にあたる。

中村館長について思い出すのは、田中先生が大阪市立美術館からの依頼で、10日間ばかりアメリカに出張中でお留守になった時、大学院生であった筆者が大学の恩師で白鶴美術館の評議員をも務められた磯博先生の指示を受け、田中先生の不在期間を白鶴美術館で過ごした時のことである。美術館の事務室の窓際で、本や資料が山積みされた先生の机を一時的に使わせていただいた。美術館の学芸員的な仕事はなかったので、大学の課題をまとめていたように思う。美術館事務室ではご高齢の中村館長と二人きりであった。初めはかなり緊張気味で時間が経つのが遅く感じられたほど気詰まり感があった。しかし昼食時になるとそれが一変した。中村館長は昼食時に必ずサンドウィッチとみかん1個を摂っておられた。食事の後で軽く睡眠を取られる前に、中村館長はさまざまなお話を気さくにされた。ブラジル移民を扱った石川達三の小説『蒼氓』の話になった時、少し前にその小説を読み終えていたので、話題に入れてホッとしたことを思い出す。このような文学の話題も出て、興味が尽きない昼休みを過ごさせていただいた。田中先生は本書のあとがきに「作品の見方や芸術のすばらしさを教えていただきました」とし、その恩師に関西学院大学の加藤一雄先生とともに中村純一館長をあげておられる。先に書いた私的な経験からしても、大学院を修了された若干26歳の田中先生にとって、中村純一氏との出会いは刺激的であつたに違いない。そして中村館長に関連する狩野元信筆の「四季花鳥図屏風」、伝狩野永徳筆「四季花鳥図屏風」という桃山時代の名作との出会いは、以後に展開される狩野派の絵師並びに作品研究において重要な契機となったことは想像するに難くない。なかでも前者は、本書カバーと折り込み口絵にカラーで掲載されており、とくに先生の思い入れの深さがしのばれる。

3 美術雑誌『古美術』『日本美術工芸』での仕事

美術史研究論文の公表に必要なものの一つに図版がある。図版が美しく、枚数を多く掲載する頁が確保されておれば、それに越したことはない。田中先生はこうした条件にかなう美術雑誌に多く投稿された。その一つは『古美術』（三彩・三彩新社）である。『古美術』はA4版で、カラー頁が多くを占め、美術の特集が組まれるなど学芸的な要素を持つ豪華な美術雑誌であった。当時としては大型の版形とカラー図版が載る雑誌として定評があった。田中先生は30歳代で、『古美術』に論文3本、40歳代で2本の論文を掲載しておられる。それらは次のとおりである。「田能村竹田筆「金箋春秋図屏風」」（昭和50年1月。33歳。本書第二章第6節）、「徹山巧」（昭和50年9月。33歳。本書第四章第5節）、長沢芦雪筆「雪芦水禽図襖絵」（昭和56年7月。39歳。本書第三章第3節）、「寄合書百人一首カルタ」（昭和59年1月。42歳。本書第二章第5節）、「久遠寺の障壁画について」（平成2年4月。47歳。第一章第6節）。ご専門の狩野派だけではなく諸派の絵師を取り挙げておられ、研究の幅が広がりを見せている。

掲載の回を重ねるたびに編集者と懇意になられた先生は、そのつながりを他者に広げることされた。

筆者は大学院時代に室町水墨画を研究しており、白鶴美術館蔵の伝周文筆「四季山水図屏風」を室町時代の御用絵師小栗宗丹や子の宗継と関連する作品としてこの雑誌に紹介させていただいた。紹介の労をおとりくださったのが田中先生である。筆者は後日その作品と関連するテーマで学会発表を行った。先生は美術史を学ぶ学生に対して、その学生が研究対象としているテーマと関連する作品を紹介し、研究と発表の機会を提供することを惜しまれない。

続いて挙げる美術雑誌は『日本美術工芸』（日本美術工芸社）である。『日本美術工芸』は大阪府池田市の逸翁美術館を創設した小林一三氏が関わる美術雑誌で、1937年10月に創刊された『阪急美術』を継承している。A5版の小型であるが、美術全般に関するさまざまな特集記事や連載があり、美

術情報誌として評価が高い。

この雑誌には先生の新しい視点がうかがえる。それは、分担執筆の形で連載された「障壁画の旅」「続障壁画の旅」で示された。「障壁画の旅」は1984年（昭和59年）6月から連載が始まり、1986年（昭和61年）11月まで30回続いた。執筆者は姫路市にある兵庫県立博物館学芸課長の木村重圭氏、同博物館学芸員の菅村亨氏、白鶴美術館の学芸課長であった田中先生の3名である。この連載の途中、44歳の田中先生は白鶴美術館から大阪芸術大学に転任されている。「続障壁画の旅」はそれに続いて、1992年（平成3年）1月から1994年（平成4年）12月まで24回の連載になるものである。執筆者は、先の木村重圭氏、田中先生は同じであるが、菅村亨氏が鹿児島大学助教授（現在は、広島大学教授）として転任されたために参加されず、大手前女子大学助教授の冷泉為人氏（現財は、公益財団法人時雨亭文庫理事長）、大阪市立美術館学芸員の土井久美子氏、堺市博物館研究員の井溪明氏（現在は、堺市立みはら歴史博物館長代理）が加わって5名となった。この連載の間に木村重圭氏は兵庫県立博物館学芸課長兼館長補佐（前甲南女子大学教授）に昇格された。このシリーズでの調査対象は、関西を中心に行っているが、萩市、福井市、岡山県、岐阜県、長野市、東京都など広範囲に現存する寺社や個人の住宅の障壁画を紹介するというものである。

障壁画は室町時代以降の書院造りの流行とともに、室内空間を間仕切るために配された山水画や花鳥画、人物画などを描いた襖や屏風などを指す。桃山時代から江戸時代初期には武将による大規模な殿舎の建築が盛んになり、金箔や濃彩色を用いた勇壮な構図の金碧障壁画が盛行した。この時期の狩野派は障壁画に多く筆を染めた。現在も各地にさまざまな障壁画が残存し、この時期の絵師の活動や作風の変遷などを考える上でさまざまな興味ある問題を含んでいる。「障壁画の旅」シリーズは存在が広く知られていない、いわば埋もれている作品の発掘である。2期に分けた4年間の長期連載で取り上げられた社寺や住宅は47箇所あり、大半が未紹介の障壁画であることがこのシリーズを特徴づけている。

表1 『日本美術工芸』「障壁画の旅」(昭和59年6月～昭和61年12月)

(タイトル)	(号数)	(発行)	(本書該当章節)	(年齢)
「本興寺(尼崎市)の障壁画」(障壁画の旅1)	549号	昭和59年6月	第四章第1節	42歳
「普賢院(岡山市)の障壁画一森一鳳の襖絵一」(障壁画の旅4)	552号	昭和59年9月	第四章第4節	42歳
「常高寺(小浜市)の障壁画一狩野洞春美信の壁貼付・襖絵一」(障壁画の旅7)	555号	昭和59年12月	第一章第13節	42歳
「薬王寺(岡山県久世町)の障壁画一岡本豊彦・塩川文麟他の障壁画一」(障壁画の旅11)	559号	昭和60年4月	第三章第4節	43歳
「興国寺(和歌山県由良町)の障壁画一土方稻嶺の襖絵一」(障壁画の旅16)	564号	昭和60年9月	第三章第7節	43歳
「大安寺(福井市)の障壁画一狩野元昭の襖絵一」(障壁画の旅19)	567号	昭和60年12月	第一章第17節	43歳
「久本寺(大阪市)の障壁画一蔀閑月・墨江武禅他の襖絵一」(障壁画の旅22)	570号	昭和61年3月	第四章第6節	44歳
「白峯寺(坂出市)の障壁画一狩野親信等の襖絵一」(障壁画の旅25)	573号	昭和61年6月	第一章第16節	44歳
「東光寺(萩市)の障壁画一雲谷派の襖絵一」(障壁画の旅29)	577号	昭和61年10月	第二章第4節	44歳

表2 『日本美術工芸』「続障壁画の旅」(平成3年1月～平成4年12月)

(-----は本書未掲載)

(タイトル)	(号数)	(発行年月)	(本書該当章節)	(年齢)
「善光寺(長野市)大勧進行在所の障壁画一住吉廣行・廣尚・板谷桂意一」(続障壁画の旅4)	631号	平成3年4月	第二章第3節	48歳
「興正寺別院(富田林市)の障壁画一狩野寿石秀信一」(続障壁画の旅7)	634号	平成3年7月	第一章第11節	48歳
「千光寺(岐阜県丹生川村)の障壁画一三熊思孝(花頼)一」(続障壁画の旅8)	635号	平成3年8月	第三章第6節	48歳
「妙法寺(東京都)の障壁画一自然と融合した空間一」(続障壁画の旅11)	638号	平成3年11月	-----	48歳
「旧杉山家(富田林市)の障壁画一狩野杏山守明一」(続障壁画の旅15)	642号	平成4年3月	第一章第19節	49歳
「静岡浅間神社の障壁画一狩野栄信・寛信一」(続障壁画の旅21)	648号	平成4年9月	第一章第15節	49歳
「某家(藤井寺市)の障壁画一狩野永叔・渡辺南岳他一」(続障壁画の旅24)	651号	平成4年12月	第一章第14節	49歳

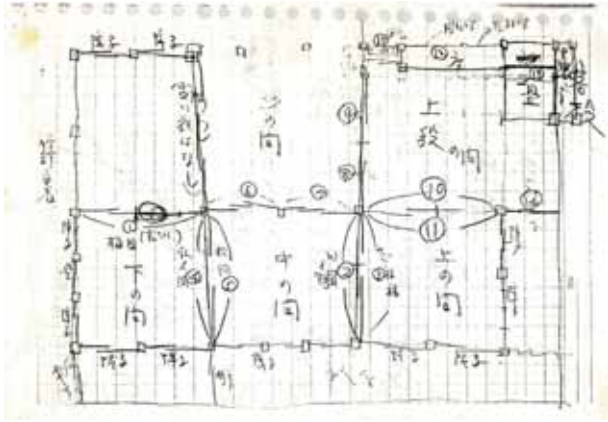
このシリーズで田中先生が担当された箇所を、本書掲載の章節、その時の先生の年齢を添えて順にあげたものが表1、2である。

このよう「障壁画の旅」「続障壁画の旅」の全54回の内、「障壁画の旅」においては9回、「続障壁画の旅」では7回の計16回分が田中先生分担分で、全体のおよそ3分の1である。連載期間は42歳から49歳までの8年間で40歳代のほぼ大半をこの「障壁画の旅」シリーズに注がれたことになる。本書にはその中の1回分を欠く15回分が掲載されており、それが本書の全掲載論文の3分の1を占めているところからすると、先生の研究活動のうちで、ご自身のもっとも思い入れ深い時期の成果と判断される。

これらの論文は紙面数と形状の限られた雑誌への発表であるために、それぞれの作品の特徴を論述するには限界が

あった。したがって分担執筆者は作品紹介に徹している。こうした制限のある紙面にもかかわらず、寸法、画題、作者、そして襖、床や小壁の貼付け、杉戸、屏風腰貼付けなど障壁画が嵌められた位置がわかる建物の部屋割りを平面図として掲載し基本的なデータが必ず提供されている。作品の図版は、襖絵であれば4面、6面と連続しているため、2頁に渡って掲載され、図様の構成が明確にたどられるように配慮されている。さらに落款と印章も掲載し、視覚的に作品を理解できるように可視的データも揃っている。障壁画の基本的なデータを組み込み、資料としての利便が図られていると言える。本書に収録された15回分すべてに建物の平面図が省略されている点は納得がいかないが、紙面の都合上、やむを得ない処置であったのかもしれない。

筆者は田中先生の担当された「障壁画の旅」にアシスタント



(写真2) 調査・久本寺客殿平面図(田中先生直筆)



(写真3) 久本寺調査時のスナップ(部屋の隅で調査する田中先生44歳)

としてご一緒させていただいた。訪れた寺をあげると大学院時代には岡山市の普源院、和泉市久保惣記念美術館の学芸員時代には福井市の大安寺と大阪市の久本寺、そして香川県坂出市の白峯寺である。田中先生は、調査後数日するとご自身の調査記録をコピーして送ってくださった。そこには礼状と平面図が添えてある。筆者の手元に保管してあることがわかったので田中先生直筆の久本寺の平面図コピー(写真2)と、これもたまたま久本寺の調査状況がわかる写真(写真3)が出てきたので併せて掲載させていただいた。部屋の隅にまとめられた書画を調査される当時44歳の田中先生は、白いシャツにネクタイという正装である。写真前方にも書画の箱や軸がまとめてある。このような調査状況は、久本寺に限らない。障壁画だけではなく、書や絵の軸ものなども調査の対象にされていたことを示している。通常30点ほどの作品を1日目いっぱいかかって調査したように思う。雉が羽を広げて飛んでいる図の襖が壁に立てかけてあるのが写っているが、調査時はこのように襖をはずして順次撮影するのである。この襖絵は久本寺客殿中の方に嵌められている大坂画壇の絵師・蔀関月(1747～1797)の金箋著色画で、全図を本書に掲載し、狩野派風の構図として紹介されている。

筆者は「障壁画の旅」シリーズの調査以外でも、作品調査に同行させていただいて、住職やコレクターに紹介していた

だったが、所蔵者との対応の仕方や作品調査の現地訓練は、それ以降に個人で行う調査においておおいに役に立った。後輩たちが大学ではこのような指導を受けることに限界があったことに対するケアであったのかもしれない。筆者以外にも先生から現地訓練の指導を受けた学生や学芸員がいる。本書では略されているが、「障壁画の旅」シリーズで作品調査に同行した人物が『日本美術工芸』に記載されている。後輩思いの優しい先生の人柄がにじみ出ている。

先生が調査中に見出された作品が、知己の研究者が研究テーマにしている作品だとわかると、その情報をその研究者に紹介されたこともあった。たとえば、その作品は長野県の長国寺の調査の際に田中先生が見出された江戸初期の絵師・岩佐又兵衛筆とされる「堀江物語絵巻」の残欠1巻である。この絵巻は香雪美術館ほかに所蔵される4巻に続く最終巻の5巻目にあたることが、この残欠本の情報をもとに研究された磯博先生の論文で明らかにされた。田中先生はこのように、自らの研究対象から逸れる作品を見出された時は、他者に情報を伝え、研究を補佐することを惜しまれない。

4 障壁画ほかをめぐる研究姿勢について

「障壁画の旅」シリーズで取り挙げられた作品を描いた絵師について見てみると、著名な絵師は少数で、むしろ忘れられている絵師、評価されていない絵師が含まれている。試みに名の知れた絵師をあげるとすれば、狩野派で幕府御用絵師の最高位である奥絵師で木挽町狩野家の狩野伊川院栄信(1775～1828)、同じく奥絵師で濱町狩野家の狩野融川寛信(1778～1815)(いずれも本書第一章第15節)、住吉派では幕府御用絵師で寛政度禁裏造営などによって住吉派を再興したことで知られる住吉廣行(1755～1811)(本書第二章第3節)、四条派の呉春の弟子岡本豊彦(1773～1845)(本書第三章第4節)、円山応挙の弟子森徹山の養子となり大坂画壇で一派を成した森一鳳(1798～1871)(本書第四章第4節)であろうか。名の知れたこれらの絵師でも、日本美術史や歴史を学んでいれば別であるが、それらに興味があれば誰一人名を聞いたことがない人物たちかもしれない。

このほかに「障壁画の旅」シリーズで取り扱われた絵師を挙げると、大半が歴史に埋もれている絵師たちである。本書の記述とともに一部を挙げてみよう。小浜市の常高寺の上段の間床の壁貼付け観瀑図を描いた狩野洞春美信については「美信の作品の少ないなかで」(本書第一章第13節)、藤井寺市の個人宅の松図襖4面を描いた狩野永叔(1675～1724)については「狩野永叔の作品についてはあまり知りえないが」(本書第一章第14節)と記された。香川県坂出市の白峯寺の客殿にある鹿の間の12面に渡る楓に鹿図を描いた狩野親信(～1888)は高松藩御用絵師であるが、「一地方の藩の御用絵師として、狩野派の様式を守ることで一生を終えた」(本書第一章第16節)とされる。富田林市の民家田杉山家にある松図ほかの障壁画に見られる「狩野杏山守明」なる絵師は、「如何なる画人なのか。各種画人伝等を調べたが記載されていない。」(第一章第19節)。和歌山県由良町にある尺八の普化宗本寺として著名な臨濟宗妙心寺派の興国寺は書院ほかに鳥図など土方稲嶺(1740～1807)の襖絵が現存する。稲嶺について「襖絵の作品は多くなく、現在知るとこ

ろは(中略)四面である。」(本書第三章第7節)とされる。あと一例挙げると、大阪市谷町八丁目にある両替商天王寺屋の庇護を得てきたところから豪商の寺院として知られた久本寺の客殿にある松林図襖ほかは墨江武禪(1734～1806)、梅に雉図ほかは菴関月(1747～1789)の筆になる。「両人は全国的にはあまり著名な画家ではないが大坂画壇では興味ある画家達である。」との感想が述べられている。これらの記述からわかるように、関連する作品が少ないか、画人伝類には登場しない絵師か、地方では活躍したが全国的な知名度を得ていないなど、多くの人に知れ渡った絵師ではなく、その逆で、的確な表現ではないがいわば歴史に埋もれ忘れられようとしている絵師たちの障壁画が取り扱われている。作品が残っているのに絵師の正体が知れないという事実を突きつけられるとやや暗澹となるのが一般的な対応であるにもかかわらず、この「障壁画の旅」シリーズでは、その絵師たちをさまざまな資料を繙いて経歴を調べ上げ、画暦を尋ねて美術史上の位置づけを行っている。それらが不明な場合でも、美術史の光を当て再評価に至る道筋が与えられるように努めるという研究姿勢で対応しておられる。そこに田中先生の新しい視点が見出されるのである。

たとえば、本書第一章第11節に納められた「興正寺別院(富田林市)の障壁画」を例にあげよう。興正寺別院は大阪芸術大学の近隣市の富田林市寺内町にあり、永禄4年(1561)の建立になるとされる古刹である。その本堂の外陣に建てられた4面の堂々とした松図襖に「狩野寿石筆」の落款と印章を残すことから存在が現れた狩野寿石秀信は、「狩野永徳の門人である狩野祖西を家祖とする猿屋町代地狩野家に生まれ、父は素川信政である。(中略)そのように本家筋から重要視されていた信政の子として生まれた寿石秀信も幕府御用絵師として活躍した。寿石由来書によると寿石秀信の画歴は華々しく、御所・東福門院御所・東宮御所・仙洞御所・江戸城・大坂城・二条城の画業に携わり、大作に筆を揮った。」「寿石秀信の生没年であるが、『古画備考』に記載の由緒書では「享保三戊年七月十七日卒七十五」とあり『扶桑名畫傳』では七十九歳、『東洋美術大観 日本絵画史下』では

「享年八十」とある。寿石秀信の享年については当人筆の「別所長治夫妻画像」(二幅)について田邊昌平氏の研究によると「八十歳とみて可なるのではないかと思われる」と考察されている。そうすると生年は寛永十六(一六三九)年で没年は享保三年(一七一八)年となる。」まとめとして、「興正寺別院の狩野寿石秀信の襖絵は狩野派の江戸時代前期の悼尾を飾る作品で、どこことなく桃山の残照が感じられる。また、寿石秀信が描いた各所の障壁画が永い時の流れの間に焼失した今、大画面で残る数少ない作品の一つであるとともに、代表的な作品ともなるかと思われる。」と文章を結ぶ。引用がたいへん長くなったが、この文章が田中先生の絵師に向けられた探究の過程を端的に示している。すなわち、調査において障壁画の作者を確認できる落款と印章が見出されると、その絵師がいかなる人物であるのか、血筋をはじめ画歴を確認するために、『古画備考』『扶桑名畫傳』などの画人伝や先行論文にあたり、その絵師が確認できる史料を求め手がかりを探す。また現存する作品の探索も行い、調査対象の作品を現時点で歴史的に位置づけるという手法である。落款や印章があったとしても、制作されてから経年のために画面が荒れていて文字が判読できない場合もある。この興正寺別院の場合がそれに当たる。本文には、松図襖に捺された印章二つのうちの一つが判読不能と書かれている。しかし判読できる落款と印章を手がかりにして絵師にたどりついたのである。獵犬が臭いを追って獲物を捕らえるごとくである。その丹念な追跡の経緯と成果をありのまま報告されているので、考察の過程も明らかになっている。手品師ならタネを明かすことを秘するが、美術史家は判明したところを不明な点も含めて手の内を開陳し、読者に批判を仰いでいるのである。作品に対するこのような姿勢は、美術史を研究するものなら身に付ける手法であるが、必ずしも容易ではない。それが素直に表現されていることが田中先生の文章から読み取れる。その簡潔な記述が本書に通底し、美術史を志すもののみならず、作品の所蔵者、調査でお世話になった関係者、歴史愛好者ほかの読者に、作品の意義や文化的な価値を含めた作品の魅力が伝えられているように思われる。

5 結びにかえて

美術史上で絵師は多い。田中先生が専門とされておられる桃山時代から江戸時代初期の絵師に限定すると、狩野永徳、狩野山楽、長谷川等伯、海北友松という巨匠が著名である。これらの絵師たちの作品は、いずれも桃山という時代性を濃厚に漂わせている。近世絵画を代表する絵師たちの研究で大きな成果を残された研究者として京都工芸繊維大学名誉教授の土居次義先生がおられる。筆者は大学院時代に大和文華館で土居先生の講演会に参加して、はじめて先生の声と小柄なお姿を拝し、先生が『本朝画史』『本朝画印』の実物を示され講演されている様子を覚えている。また京都や滋賀にある未公開寺院の障壁画を訪ねて歩いた時に、手引きにさせていただいたのが土居先生の論文であった。土居先生の論文集に『近世日本絵画の研究』(昭和45年11月美術出版社)がある。先生の大学の定年退職を機にこれまでの論文をまとめた内容である。研究対象の作品は桃山時代の障壁画で、狩野派を中心として、長谷川派、海北派、雲谷派をはじめ、宗達や応挙、若冲などの近世諸派にも研究の筆を執られた。なかでも高台寺の障壁画と狩野光信、妙心寺天球院の障壁画と狩野山楽・山雪、妙心寺隣華院の障壁画と長谷川等伯など、寺院の障壁画とそれらを描いた絵師の研究はその後の同じテーマの研究に先鞭をつけられた。武田恒夫、辻惟雄、大橋乗保の各氏をはじめ、それよりも若年の研究者は土居先生の研究を習っている。田中先生は土居先生からもご教示を得られたとご自身からうかがった。その教えをも基盤に加えて、見過ごされた作品や絵師を対象にして、各地の寺社に現存する未紹介の障壁画を調査され、その基礎的データを図版とともに公表されたことは繰り返し述べたところである。調査の過程で新たに確認された塩川文麟(1801~1877)などの京都画壇や大岡春ト(1680~1763)、金子雪操(1794~1857)などの大坂画壇の絵師たちの作品を介して、それぞれの画壇の絵師に研究を広げ、本書第三章の「京都画壇の研究」、第四章の「大坂画壇の研究」に展開されたことは自然の流れであったといえよう。



(写真4)『知られざる御用絵師の世界 開府～元禄』展覧会図録(平成4年)



(写真5)『知られざる御用絵師の世界 元禄～寛政』展覧会図録(平成10年)

本書では取り挙げておられないが、御用絵師をあつかった二つの展覧会のスタッフとして参加された時の図録が残されている。一つは平成4年10月に銀座松屋ほかで開催された展覧会『知られざる御用絵師の世界 開府～元禄』(写真4)、もう一つはその続編で、同じく銀座松屋ほかを会場とした平成10年4月の展覧会『知られざる御用絵師の世界 元禄～寛政』(写真5)である。これらの展示作品の選定も、「障壁画の旅」を含む従前の作品調査記録を参考にして組み立てられたのであろう。こうした展覧会の開催に結びついたことも調査の成果の一つである。

巻末に参考として先生の主要論文を発行年月と論文発表当時の年齢とともに提示した。研究の推移がたどれるようにするためである。この主要論文一覧でお気づきのように、40歳代の終わりに手を染められた「東山第一楼勝会書画帖」をはじめとして、60歳以後取り組んでおられる書画帖に関する研究がまとめられずにある。まだ研究途中とのことであろう。今後の研究テーマとして残しておられる書画帖の世界は、ある時点での絵師たちの画業の集積であるとともに、絵師のつながりやコレクターとの交流を知る手がかりなどを与える多くの情報を含んだデータベースである。研究の楽しみを残しながら、本書の続編を構想されているのであろうか。心待ちにさせていただきます。

以上のように、田中先生の業績を顧みると、未知の資料を見出し、データを開示することを通して、美術史の作品層が厚みを増したことは事実である。それをいつしか意識され、使命に感じておられるように思われる。もしそうでないならば、そうあってほしい。先生は覚えておられないようであるが、かつて関西学院大学の美学研究室で他の先生との雑談の中で、ご自身の書いた論文をゆくゆくはまとめて本にしたいと話しておられた。筆者が関学美学課の教学補佐という研究室全般にわたる手伝いをしていた時のこととしてそれははっきりと記憶している。田中先生の長年の願いがかなった本書は、先生の言葉を借りると論文と資料紹介を含んでいる。それらが、今や一研究者の手を飛び出して、だれでもが利用できるようになった。

そのままではやがて忘れられそうな絵師たち、歴史に埋もれて一部のみにしか知られないままにいる障壁画をはじめとする作品たち、それらに差し延べられた熱心で真摯な調査に基づいて書かれた本書と著者田中敏雄先生に、読者に代わってお礼の言葉を献じた。

主要論文一覧

(-----は本書未掲載)

(タイトル)	(書名)	(号数)	(発行年月)	(本書該当章節)	(年齢)
「田能村竹田筆 「金箋春秋図屏風」	『古美術』(三彩、三彩新社)	47号	昭和50年1月	第二章第6節	33歳
「徹山巧」	〃	49号	昭和50年9月	第四章第5節	33歳
「長沢芦雪筆 「雪芦水禽図襖絵」	〃	59号	昭和56年7月	第三章第3節	39歳
「寄合書百人一首カルタ」	〃	69号	昭和59年1月	第二章第5節	42歳
「久遠寺の障壁画について」	〃	94号	平成2年4月	第一章第6節	47歳
「遊魚図襖絵」	『日本美術工芸』(日本美術工芸社)	491号	昭和54年8月	第三章第1節	37歳
「応挙筆「楚蓮香図」(白鶴美術館蔵)」	〃	505号	昭和55年10月	第三章第2節	38歳
「讃岐の三十六歌仙扁額について—松平頼重奉納を中心に—」	〃	615号	平成元年12月	第一章第21節	46歳
「絵師伊藤長兵衛の二つの画業」	〃	658号	平成5年7月号	第一章第12節	50歳
「白鶴美術館蔵 狩野元信在銘 四季花鳥図屏風」	『美術史』(美術史学会)	70冊	昭和43年9月	第一章第4節	26歳
「四季花鳥図屏風(伝狩野永徳筆 白鶴美術館蔵)について」	『美学』(美学会)	111号	昭和52年12月	第一章第5節	35歳
「土佐一得考」	『研究紀要』(全国大学博物館学講座協議会)	3号	平成6年3月	第二章第1節	51歳
「正保国絵師図と御用絵師について」	『鹿島美術研究年報』(鹿島美術財団)	12号別冊	平成7年11月	-----	52歳
「大坂画壇関係の資料紹介」	『近世大坂画壇の調査研究』(大坂市立美術館)		平成10年3月	第四章第8節	55歳
「金子雪操筆 山水図襖絵について」	『近世大坂画壇の調査研究Ⅱ』(大坂市立美術館)		平成12年3月	第四章第3節	57歳
「東山第一楼勝会書画帖について」	『大和文華』(大和文華館)	85号	平成3年3月	-----	48歳
「土佐光成筆 十二首和歌絵屏風について」	『研究紀要』(野村美術館)	8号	平成11年3月	第二章第2節	56歳
「資料紹介 近藤芳樹収集「書画帖」について」	〃	17号	平成20年3月	-----	65歳
「根本幽巖の伝記と画業」	『(財)渡辺美術館所蔵品調査報告書』(渡辺美術館)		平成19年12月	-----	64歳
「河鍋暁斎筆「年中行事図巻」の模本について」	『暁斎』(河鍋暁斎記念美術館)	97号	平成20年12月	第一章第22節	65歳
「西尾武陵蒐集画帖について」	『藝術』(大阪芸術大学)	10号	昭和62年10月	-----	45歳
「江戸時代初期の狩野派の動きについて—狩野元俊の場合—」	〃	12号	平成元年11月	第一章第9節	46歳
「狩野派の画人と大友宗麟」	〃	15号	平成4年12月	第一章第7節	49歳
「狩野探幽と河内国」	〃	17号	平成6年11月	第一章第8節	51歳
「狩野梅笑筆 手巻画卷について」	〃	19号	平成8年11月	第一章第18節	53歳
「大岡春卜筆「秋色山水図」について」	〃	33号	平成22年12月	第四章第2節	67歳
「大阪芸術大学図書館所蔵大坂画壇の画家の作品について」	〃	35号	平成24年12月	-----	69歳
「高山別院の障壁画—京都諸派の合同制作をめぐる—」	『藝術文化研究』(大阪芸術大学大学院)	6号	平成14年3月	第三章第8節	59歳
「防府天満宮蔵「手鑑」(書画帖)について」	〃	8号	平成16年3月	-----	61歳
共著					
「徳川霊台の壁画」	『高野山の障壁画』	美の美社	昭和55年10月	-----	38歳
「桐鳳凰図について」	『花鳥画の世界—絢爛たる大画Ⅱ—』	学習研究社	昭和57年9月	第一章第3節	40歳
「大坂画壇研究のための二資料」	『近世大坂画壇』	同朋舎出版	昭和58年10月	第四章第7節	41歳
「狩野派様式の成立と展開」	『日本の美術—今何が古典から学べるか』	昭和堂	平成元年7月	第一章第1節	46歳
「橋本閑雪と岸本家」	『播州高砂岸本家の研究』	ジュンク堂書店	平成元年11月	第三章第9節	46歳
「山本素程について—三十六歌仙扁額と『隔冥記』をもとに—」	『美術史を愉しむ』	思文閣出版	平成8年5月	第一章第10節	53歳
「聖徳太子及び天台高僧像」	『日本の国宝』	朝日新聞社	平成9年9月	-----	54歳
「絵師伊藤長兵衛の二つの画業」	『寛永文化のネットワーク』	思文閣出版	平成10年3月	-----	55歳
「狩野派の画論—粉本による「学画」—」	『日本の芸術論 伝統と近代』	ミネルヴァ書房	平成12年4月	第一章第2節	57歳

展覧会図録					
「京阪画壇近世花鳥動物画の流れ」	『京阪画壇近世花鳥動物画の流れ展』図録	ふくやま美術館	平成元年2月	第三章第5節	46歳
「江戸時代初期における御用絵師について」	『知られざる御用絵師の世界 開府一元禄展』図録	松屋株式会社・朝日新聞社	平成4年10月	-----	49歳
「江戸時代中期における御用絵師について」	『知られざる御用絵師の世界 元禄一寛政展』図録	朝日新聞社	平成10年4月	-----	55歳
「宮廷絵所絵師の流れ」	〃			-----	
「文化のネットワークー松平不昧と交流のあった画家たちー」	『大名茶人 松平不昧展』図録	島根県立美術館 NHKプロモーション 大塚藝巧藝社	平成13年1月	第一章第20節	58歳
郷土史					
一、「豪農と京都画壇」 二、「京都の画家たち」	『国府町史』通史Ⅱ 第五章第三節 所収	国府町史刊行委員会	平成23年2月	-----	68歳

